



イラスト：永田信行

Contents

- 「1/25,000現存植生図について全国のGISデータ公開が完了しました」
「現存植生図2024 ラスタタイルURLを公開しました」…………… P 1
- 「現存植生図の利活用事例集を作っています」
「2025年度から衛星植生図を作ります」…………… P 2
- 「モニタリングサイト1000の20年にわたる調査結果をとりまとめ」…………… P 3
- 「環境DNA調査～両生類手引きを公開しました～」
「全国動物分布調査（昆虫類）を実施しています」…………… P 4
- 「東北地方太平洋沿岸地域自然環境調査のとりまとめを行いました」
「第16回APBONワークショップを開催しました」…………… P 5
- 「鳥類標識調査100周年」
「第27回自然系調査研究機関ネットワーク(NORNAC27)を開催しました」… P 6
- 「インターネット自然研究所 新しいカメラを2台設置しました」…………… P 7

表紙のイラスト

日本各地の生物多様性を1枚の絵巻にして表現した「つながりんぐ」から一部を抜粋しました。様々な生きものが描かれており、生きものたちのつながりが表現されています。絵巻の全体は生物多様性センターの展示室でご覧いただけます。



環境省 自然環境局

生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan

●1/25,000現存植生図について全国のGISデータ公開が完了しました！

1/25,000スケールの現存植生図は、平成11(1999)年度から令和5(2023)年度にかけて、関係者各位による多大な貢献により整備が進められ、令和6(2024)年に「自然環境調査Web-GIS」にて全国のGISデータ公開が完了しました。以後、「現存植生図2024」を正式名称とします。

現存植生図2024の全国GISデータ公開完了に伴い、2つのデータを更新しました。

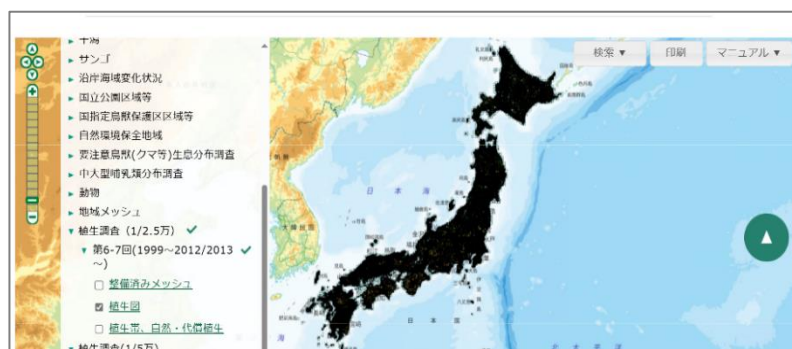
1. 植生自然度一覧表：現存植生図2024のすべての凡例に植生自然度の値を付与しました。
2. 全国植生調査データベース：優占種調査34,596地点、組成調査46,159地点、資料調査1,081地点の情報が登録されています。

今後はユーザー目線からみて利用しやすい情報提供を目指して、環境ジオポータルなどを活用したオープンデータ化を進めます。

- 自然環境調査Web-GIS ウェブサイト
<http://gis.biodic.go.jp/webgis/>

- 植生調査 ウェブサイト
<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-006.html>

- 全国植生調査データベース 案内文
http://gis.biodic.go.jp/webgis/files/veg_survey_db_2000-2023.pdf



自然環境調査Web-GISで示された1/25,000現存植生図

●現存植生図2024 ラスタタイルURLを公開しました！

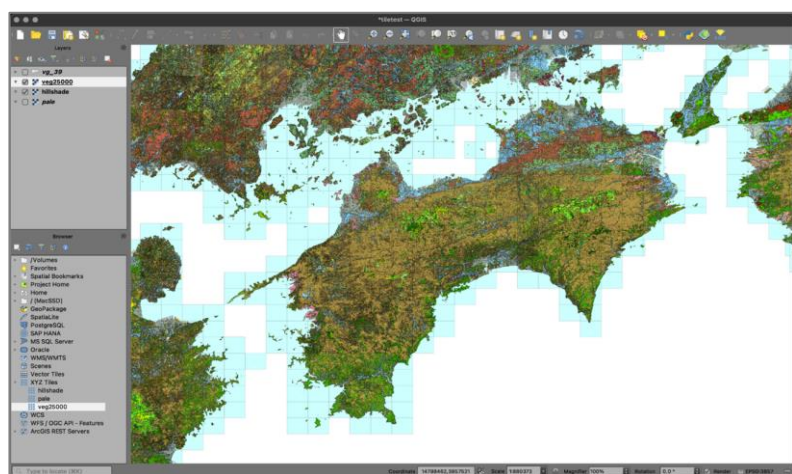
現存植生図2024の全国のGISデータ公開完了に伴い、現存植生図2024のラスタタイルURLを公開しました。

今回、現存植生図2024ラスタタイルURLを公開したことにより、GISアプリケーション（QGISなど）にて、本ページ下部に記したURLを設定いただくだけで、日本全国の現存植生図2024データを表示できるようになりました（図参照）。

現存植生図2024ラスタタイルの上に、国立公園や市町村データなどを重ね合わせることで、複合的な情報を図化できます。

また、スマートフォンやタブレット端末で地図アプリケーションにURLを設定すれば、現存植生図2024を背景表示することも可能になりました。実際に山を歩きながら、自分がどの群落の中にいるのかリアルタイムで確認することも可能です。

今後、より使いやすいラスタタイルやベクタタイルの作成を進める予定です。



オープンソースGIS(QGIS)を用いたラスタタイルの参照（XYZ Tile）画面

- 自然環境保全基礎調査 植生調査 植生図ラスタタイル設定URL
<http://gis.biodic.go.jp/webgis/files/vg67/tile/vg67/{z}/{x}/{y}.png>

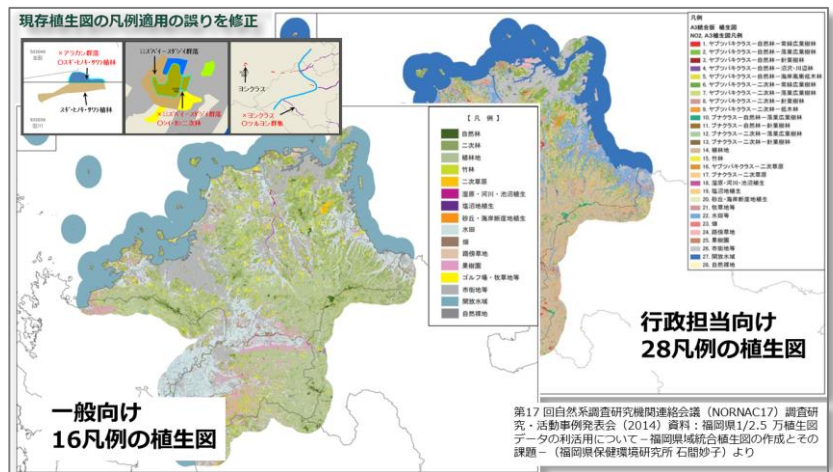
●現存植生図の利活用事例集を作っています！

現存植生図の利活用促進に向けて、「現存植生図の利活用事例集」を作成中です。もし素敵な活用事例をご存知でしたら、本ページ下部の宛名までご連絡いただけますと大変助かります。

活用事例をひとつご紹介します。福岡県では、生物多様性地域戦略での基礎資料として、現存植生図2024が活用されています。

ここでは、行政担当向けとして、28凡例に統合された植生図（右図）が作成されており、さらに、一般向けとして、自然林や二次林といったわかりやすい16凡例に統合された植生図（左図）も作成されています。

これらの植生図は、「福岡生きものステーション」サイトにおいてWeb-GIS形式で公開されています。



●利活用事例募集中です 宛名アドレス

アドレス：shokuseidb@env.go.jp

●生物多様性総合プラットフォーム（福岡生きものステーション）

<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/map.html>

現存植生図の利活用事例：生物多様性地域戦略（福岡県域統合植生図）

●2025年度から衛星植生図を作ります！

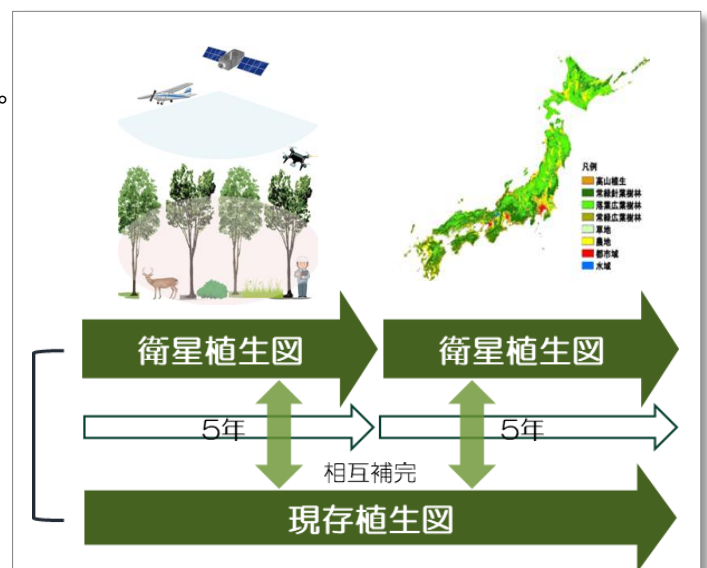
次年度以降の植生図整備の予定についてご紹介します。

現存植生図2024は、自然環境の把握や種分布推定モデル構築に資する基盤情報として利活用されています。しかし、現存植生図2024の全国整備には約25年間もの長い時間がかかったために、地域により調査年が大きく異なり、解析評価に用いにくいという課題がありました。

そこで、今後は、ネイチャーポジティブ活動等に貢献できるよう、速報性とわかりやすさを重視した植生図を整備する予定です。

令和7(2025)年度から、衛星植生図を5年ごと、現存植生図を10年ごとに整備更新（右図参照）することを目指し、衛星植生図の整備に着手します。

衛星植生図は、分類クラスの見直しとリモートセンシング技術の積極的活用により全国整備を進め、衛星画像データで把握できない情報については、現地調査等により補完することを想定しています。



速報性を重視した自然環境情報の整備イメージ図

●モニタリングサイト1000の20年にわたる調査結果をとりまとめ！

重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト1000）では、5年に一度、調査開始時からの全データを分析した「とりまとめ報告書」を作成しており、令和6（2024）年度には、高山帯、森林・草原、里地、ガンカモ類、シギ・チドリ類、沿岸域、サンゴ礁の7つの生態系/分類群の調査でとりまとめ報告書を作成しました。これらの報告書から、20年間の調査で明らかになった、身近に見られる生き物の減少傾向、気候変動の影響、外来種の拡大傾向などの日本の自然の変化・異変をまとめ、「モニタリングサイト1000第4期とりまとめ報告書概要版」を作成し、令和6（2024）年10月に公表しました。

概要版の主な内容は以下のとおりです。

<身近に見られる生き物たちの減少傾向>

里地や森林・草原ではスズメ・ヒバリ、内陸湿地や沿岸域ではシギ・チドリ類、小島嶼ではカモメ類など、身近に見られる生き物たちの減少傾向が見られました。



スズメ（撮影：石原隆志氏）



タシギ（撮影：青木一夫氏）



ウミネコ（撮影：富田直樹氏）

減少傾向がみられた身近な生き物（鳥類）

<気候変動の影響>

陸域では、高山帯でのハイマツの生長量の増加、森林での暖かい気候を好む樹種の増加および寒い気候を好む樹種の減少、里地での南方系チョウ類の増加などの傾向が見られました。

海域では、各地のアマモ場・藻場の衰退・消失が見られ、サンゴ礁では夏季の高水温が原因とみられる白化現象が頻繁に見られるようになり、いずれも温暖化が影響していると考えられます。

伊豆下田 サイト

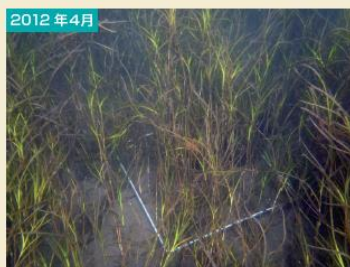


2015年
カジメ類が繁茂していた
（撮影：青木優和・坂西芳彦・田中次郎）



2021年
カジメ類の葉状部はほとんど魚類に食べられていた
（撮影：倉島 彰）

指宿サイト



2012年4月
アマモは良好に育っていた
（撮影：島袋寛盛）



2018年4月
アマモは全く見られなかった
（撮影：島袋寛盛）

各地で進む藻場・アマモ場の衰退と消失

令和7（2025）年4月には、概要版にイラストや写真を豊富に加えた「とりまとめ報告書概要版パンフレット」を各行政機関や調査研究機関に配布する予定です。「とりまとめ報告書」、「とりまとめ報告書概要版」、「とりまとめ報告書概要版パンフレット」は、モニタリングサイト1000のHPで掲載しています。

●モニタリングサイト1000 ウェブサイト<https://www.biodic.go.jp/moni1000>

●環境DNA調査～両生類手引きを公開しました！～

生物多様性センターでは、生物を直接捕獲せず、水等の環境中に含まれる遺伝子情報（環境DNA）を用いて生物の生息情報を取得する「環境DNA分析技術を用いた調査手法」について、標準化・一般化（実用化）を進めています。

主に二次的自然に生息する淡水魚類を対象とした手引きを令和2（2020）年に公開して以降、令和3（2021）年度から両生類を対象とした検討をすすめ、令和6（2024）年5月に、淡水魚類に関する既存の手引きに両生類に関する内容を新たに加えた『環境DNA分析技術を用いた調査手法の手引き（淡水魚類・両生類）第一版』を公開しました。

主に初めて環境DNA技術を利用する行政担当者や保護団体等を対象とし、現地調査の実施時期や採水時の留意点等、調査実施の参考になる内容を記載しています。ぜひ自然環境保全等の各種施策や取組にお役立てください。

●環境DNA調査 ウェブサイト

https://www.biodic.go.jp/edna/edna_top.html



環境DNA分析技術を用いた調査手法の手引き
（淡水魚類・両生類）第1版

●全国動物分布調査（昆虫類）を実施しています

令和4（2022）年度に策定した自然環境保全基礎調査マスタープランに基づき、約25年ぶりに昆虫類分布調査（令和5（2023）～令和8（2026）年度）を実施しています。

調査対象種は昨今の環境施策を踏まえて86種を選定し調査をしています。令和6（2024）年度調査では、①論文や博物館紀要等の既存文献の収集、②全国の昆虫同好会や有識者への生息地に関するアンケートの送付、③生物多様性センターが運営しているプラットフォーム「いきものログ」を活用した市民参加型昆虫調査「緑の国勢調査！みんなで虫（むし）らべ2024」の調査に加えて大学博物館等に収蔵されている標本を調べる予定です。

全国的な生息分布情報をとりまとめて分布状況を可視化し、過去の結果と比較することで、行政が実施する環境保全の政策推進や一般の方々への普及啓発を図ります。

●報道発表 市民参加型昆虫調査「緑の国勢調査！

みんなで虫（むし）らべ2024」の実施について

https://www.env.go.jp/press/press_03492.html



昆虫類分布調査対象種オオムラサキ
（撮影：生物多様性センター 平松新一）

●東北地方太平洋沿岸地域自然環境調査のとりまとめを行いました！

平成23（2011）年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方太平洋沿岸の自然環境に大きな影響を与えました。環境省では震災発生以降、重点地区調査、生態系監視調査などの自然環境調査を行ってきました。令和6（2024）年度はこれらの調査結果をとりまとめるとともに、調査で得られた成果や調査時の課題を整理しました。

重点地区調査では、動植物相調査やベルトトランセクト調査の結果から、海浜の動植物は環境が安定すれば10年程度かけて回復し安定する傾向が見られました。一方で、干潟、湿地などは土地改変や乾燥化の影響を受け、生息環境自体が消失している場所もありました。

生態系監視調査について、干潟の底生生物の種数は多くの地区で増加傾向にあり、震災前を上回る地区もありました。アマモ場ではアマモ類が全体的に減少し、回復傾向は地区ごとにばらつきがありました。藻場では群落の規模は震災前と同程度かそれ以上に回復している地区がありました。

重点地区調査



動植物相調査

陸域で重要と考えられる自然環境16地区を選定し、ベルトトランセクト調査、動植物相調査を行いました。

生態系監視調査



干潟調査

震災の影響を特に受けたと思われる干潟（18箇所）、アマモ場（5箇所）、藻場（2箇所）について調査を行いました。

●第16回APBONワークショップを開催しました

令和7（2025）年1月29日から30日にかけて、アジア太平洋生物多様性観測ネットワーク（APBON）ワークショップがアセアン生物多様性センター（ASEAN Centre for Biodiversity: ACB）（フィリピン・ロスバニョス）がホストとなって開催され、約30名が現地で参加しました。

村岡裕由APBON共同議長（東京大学教授）、クラリッサ・アリダACBディレクター代理から開会挨拶があった後、アジェンダに沿って発表及び議論を行いました。

APBONはアジア太平洋地域におけるデータのギャップとニーズの特定のために活動してきましたが、特に令和4（2022）年に生物多様性条約（CBD）で採択された昆明・モントリオール生物多様性枠組に照らして生物多様性データシェアリングの必要性が浮き彫りとなって来ました。

そこで今回のワークショップでは、生物多様性データのギャップ特定とそれを埋めるための方策、入手可能な生物多様性必須変数

（EBVs）とEOVsの開発の方法、地域におけるデータシェアリングのための利害関係者及び機関との間の協力、グローバルな枠組に合わせた取組等が議論されました。

データギャップの特定や、これを克服するための方向性の共有について前進が見られました。

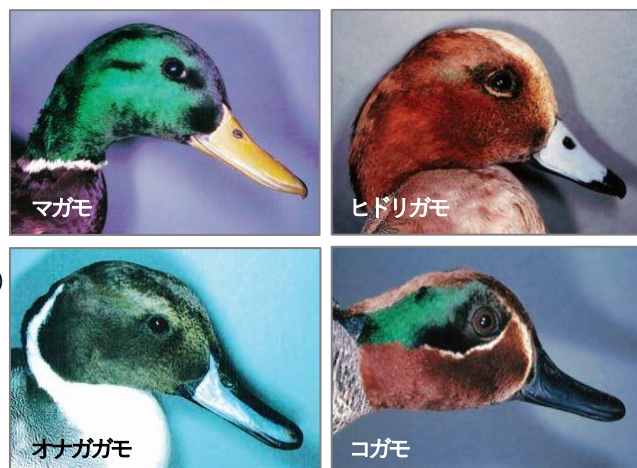


●鳥類標識調査100周年！

鳥類標識調査は、野生の鳥に足環などを装着し、再捕獲や観察によって収集した情報を解析することにより、鳥類の渡りの実態や生態を明らかにし、鳥類の保全施策や国際協力の推進に役立てる調査です。日本の鳥類標識調査は大正13（1924）年に初めて行われ、令和6（2024）年に100周年を迎えました。現在は環境省生物多様性センターが山階鳥類研究所に委託し、多数のバンダー（鳥類標識調査員）の協力により実施しています。

鳥類標識調査で得られた結果をわかりやすくお知らせするため、令和2（2020）年からニュースレター「バンディングかわら版」を発行し、Webサイトに掲載しています。令和6（2024）年度に発行したバンディングかわら版（第9号）では、カモ類4種（マガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、コガモ）の混群を対象に移動距離のシミュレーション解析を行いました。

鳥類標識調査で得られた移動データはWebサイトの「鳥類アトラスWeb-GIS」ページからダウンロードでき、Google Earthを用いて地図上に表示することもできます。



カモ類4種（マガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、コガモ）

●鳥類標識調査 ウェブサイト

<https://www.biodic.go.jp/banding/index.html>



●第27回自然系調査研究機関ネットワーク(NORNAC27)を開催しました！

令和6（2024）年11月19日(火)～20日(水)に、神奈川県立生命の星・地球博物館をホスト機関としてNORNAC27を開催しました。

1日目の連絡会議では、国立環境研究所より「カメラトラップによる協働型野生動物モニタリング「Snapshot Japan」の参加募集について」の紹介や、当センターよりモニタリングサイト1000第4期とりまとめ報告書の公表、市民参加型昆虫調査「緑の国勢調査！みんなで虫らべ2024」の実施、生物多様性情報の標準化に向けた取組などの話題提供をさせていただきました。

2日目の調査研究・活動事例発表会では、NORNAC構成機関から「埼玉県における県民参加を主体とした特定外来生物”クビアカツヤカミキリ”被害調査」や「能登半島地震における隆起と潮間帯動植物への影響について」などホットな話題について22テーマの発表がありました。発表会では、最新の調査事例を発表いただき、全国各地の調査研究や活動の成果について、活発な意見交換が行われました。



NORNAC27 連絡会議の様子

次回の第28回自然系調査研究機関ネットワーク（NORNAC28）は、令和7（2025）年に山梨県富士山科学研究所をホスト機関として開催する予定です。

●NORNAC ウェブサイト

https://www.biodic.go.jp/relatedinst/rinst_main.html



●インターネット自然研究所 新しいカメラを2台設置しました！

生物多様性センターでは、「インターネット自然研究所」として、全国51箇所に設置されたライブカメラを用いて日本全国の国立公園や国指定鳥獣保護区、野生生物保護センター等で撮影された日本の多様で美しい風景や野生動物のすがたを発信しています。

今回は「尾瀬沼」と「嬬恋村からみた浅間山」のライブカメラをご紹介します。

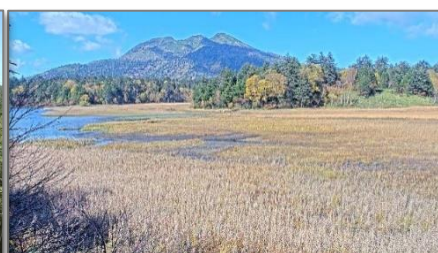
「尾瀬沼」は木々の成長により当初想定していた景観をお届けできなくなっていたため、カメラの移設を行いました。これによりふたたび燧ヶ岳と尾瀬沼を一望する景色の配信が出来るようになりました。令和6年秋頃から配信を行っており、これから撮影される雪が解けた春の景色や夏の青々とした景色もお楽しみにお待ちください。また、「嬬恋村からみた浅間山」は、新規に設置したライブカメラ

で、国内有数の活火山である浅間山を望む雄大な景観をみることができます。特に夏の青空と浅間山からなるさわやかな風景が撮影されるのを楽しみにお待ちください。なお、本カメラは唯一夜間撮影もしていますので、火映など、浅間山の火山活動が撮影できるかもしれません。

このほかのライブカメラでも日本が有する多種多様な自然環境を配信しております。まだ訪れたことのない場所の景色からレジャーの計画や、すでに訪れたことのある場所の景色を見て訪れた当時の振り返りと、インターネット自然研究所が配信する景色をぜひお楽しみください。



尾瀬沼（移設前）2024.10.1撮影



尾瀬沼（移設後）2024.10.17撮影



尾瀬沼（移設後）2025.1.5撮影



嬬恋村からみた浅間山 2025.2.12撮影

●インターネット自然研究所 ウェブサイト
<https://www.sizenken.biodic.go.jp/>



生物多様性センター 各科の担当

管 理 科

庶務・会計・施設維持管理等

保 全 科

モニタリングサイト1000、
全国ガンカモ一斉調査等

調 査 科

自然環境保全基礎調査、
環境DNA調査、鳥類標識調査等

情 報 シ ス テ ム 科

生物多様性情報システム(J-BIS)、
いきものログ、普及啓発、標本管理等

利 用 案 内

- 開館時間 午前9時～午後5時
- 休館日 冬季期間（12月～4月下旬）の土日祝日
年末年始（12月29日～1月3日）
- 入館料 無料

※団体でご利用される場合は事前に連絡をお願いします。

交 通 案 内

- 富士急行線・中央高速バスで河口湖駅または富士急ハイランド駅下車、タクシーで約10分
- 中央自動車道・河口湖ICまたは東富士五湖道路・富士吉田ICより車で約10分



環境省 自然環境局

生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan

〒403-0005 山梨県富士吉田上吉田剣丸尾5597-1

ウェブサイトURL <https://www.biodic.go.jp>

TEL：0555-72-6031（代表） E-mail：biodic_webmaster@env.go.jp

